

## 『数学史研究』投稿規定

2021年9月26日

日本数学史学会運営委員会

1. 投稿は、会員または会員の紹介あるものに限る。ただし連名の場合、そのうちの一人が会員であればよい。
2. 内容は、数学史に関係あるもので公刊されていないものに限る。二重投稿は認めない。
3. 原稿は A4 版横書きで 1 ページ 32 行、1 行 40 字で作成する。原稿の書式は、別表の形式による。HP から word のテンプレートあるいは LaTeX のクラスファイルおよびサンプルファイルをダウンロードして利用することを勧める。
4. 原稿の種別
  - (1) 原稿の種別は、論文 (original paper)、研究ノート (note)、数学史入門 (introduction)、資料 (documents)、書評・紹介 (book review)、学界動向 (academic development)、およびその他とする。
  - (2) 数学史入門、学界動向、およびその他は会員からの投稿または編集委員会からの依頼原稿とする。
  - (3) 原稿の種別は投稿者が指定するが、編集委員会に変更することがある。
5. 原稿の分量
  - (1) 原稿の分量は、論文は 20 ページ以内、研究ノートは 10 ページ以内、数学史入門は 10 ページ以内、資料は 20 ページ以内、書評・紹介は 2 ページ以内、学界動向は 2 ページ以内、およびその他は 2 ページ以内とする。
  - (2) 上記の分量を越えるときは編集委員会に問い合わせること。
6. 投稿
  - (1) 投稿するファイルは必ず投稿者自身が保管のこと。
  - (2) 投稿は、以下の URL より受け付ける。  
[https://suugakushi.com/?page\\_id=\\*\\*\\*\\*](https://suugakushi.com/?page_id=****)
  - (3) PDF ファイルとそれを作成した word ファイルあるいは LaTeX のソースファイルをアップロードする。
  - (4) 投稿に用いる PDF ファイルの容量は 10MB 以下とする。10MB を超える場合は編集委員長に問い合わせること。
  - (5) 著者の所属とメールアドレスをタイトルページの著者名に脚注として記すこと。編集委員会が非公表を認めたときはその限りでない。
  - (6) 上記の方法によらないことを希望する場合は、編集委員会に相談すること。
7. 査読
  - (1) 論文および研究ノートは 1 名以上の査読者が審査を行い、採否は編集委員会が決定する。
  - (2) 査読者は、そのまま掲載、修正の上掲載、修正の上再投稿、不掲載かを理由をつけて編集委員会に報告し、編集委員会は判断の上、査読者名を匿名にして投稿者に伝える。
  - (3) 投稿者は査読結果に異議があるときは編集委員会に申し出ることができる。
  - (4) 「修正の上再投稿」の判定を受けた場合、その通知を受けてから著者は 3 ヶ月以内に上記 6 の手順に従って再投稿すること。その後の再投稿は新規投稿となる。

8. Web による投稿が完了した日付あるいは編集委員長に論文が到着した日付を「受理日」、修正稿を受理した日付を「改定稿受理日」、編集委員会が掲載決定した日付を「採択日」とする。
9. 最終原稿
  - (1) 出版の巻号ページが決まったら、著者がそれらを所定のヘッダに書き込み、最終原稿を作成する。
  - (2) 最終の PDF ファイルとそれを作成した word ファイルあるいは LaTeX のソースファイルを、編集委員長宛にメールに添付し送付する。画像ファイルを用いる場合は画像ファイルも添付する。
  - (3) 最終原稿作成の際に、誤字などを修正する場合は修正する一覧表をつけて、編集委員会の承認を得ること。
  - (4) 採択が決まった著者は、必要なとき「掲載証明書」の発行を編集委員長に申しでることができる。
10. 別刷り
  - (1) 別刷りを希望する場合は著者負担とする。
  - (2) (1) の場合は最終原稿を送付する際に申し込むこと。
11. 影印および図
  - (1) 使用許可が必要な刊本あるいは写本などの影印は、著者が掲載の許諾を取る。
  - (2) 図を作成する際は、図形作成ソフトあるいは LaTeX の TikZ などを用いる。
  - (3) (2) の方法によらない場合は編集委員会に問い合わせること。
12. 国際化
  - (1) 論文、研究ノートおよび資料には、必ず所定の書式で英文の題目、執筆者名のローマ字表記、英文の Abstract(250 語以下) および英文のキーワード (5 個程度) を記載すること。なお、英文 Abstract の作成が困難な場合は編集委員会に相談すること。
  - (2) 数学史入門、学界動向、およびその他には、必ず執筆者名のローマ字表記と題名の英訳を添えること。書評・紹介は必ず執筆者名のローマ字表記を添えること。題名の英訳は添えることが望ましい。
13. 著作権
  - (1) 本誌に掲載された論文等の著作物の著作権は、本学会に帰属する。
  - (2) 本誌に掲載された著作物を出版物に転載する場合には、あらかじめ編集委員会の許可を受けなければならない。
  - (3) 著者あるいは著者の所属する機関が管理するウェブサイト以外のウェブサイトに転載する場合には、あらかじめ編集委員会の許可を受けなければならない。
  - (4) 最終版の PDF を著者の管理するウェブサイトおよび著者の所属するリポジトリでの公開は雑誌名と巻号ページを明示することにより認められる。
14. 原稿の表記法
  - (1) 注は脚注を用いる。1, 2, 3,... と通し番号をつける。
  - (2) 日本語表記法
    - (i) 横書き、現代仮名遣いを用いる。

引用文を原文通りにするか、現代仮名遣いにするかは著者に委ねる。歴史的仮名遣いの原文を現代仮名遣いで表現する場合は、旧字体は新字体に置き換える。

漢文の読み下し文を文語体歴史的仮名遣い、文語体現代仮名遣い、口語体現代仮名遣い、は著者に委ねる。
    - (ii) 読点は「、」(てん)、句点は「。」(まる)を用いる。

- (iii) 原則は常用漢字表 (2136 字) にない文字 (表外漢字)、およびない読み (表外音訓) はひらがなで表示する。
- (iv) 常用漢字表にあっても、慣用的にひらがなで表示する場合はひらがなで表示する。  
たとえば、接続詞 (つぎに、および、ただし、さらに)、副詞 (ように) の多くと、一部の名詞 (するとき)、動詞 (みたす) など。
- (v) 表外文字であっても使用が認められる例：
- A. 和算用語  
盈ゆ胸、点竄てん術、冪積、角亢かく氏房など。
  - B. 固有名詞  
儀村吉徳、有馬頼た僮、錢宝琮
  - C. 漢文の読み下しおよび書き下し
- (vi) 横書きの漢文に訓点を施す場合、レ点や一二点は右下付き、送り仮名は右上付きとする。
- (3) 歴史上の人名表記 (漢字文化圏)  
旧字体は同字 (常用漢字表に並べて記載されている) の新字体で置き換える。たとえば、關孝和は関孝和とする。
- (4) 歴史上の人名表記 (非漢字文化圏)  
原則として現地語の音をカタカナで表記するが、慣例に従ってもよい。原綴りをつける必要はない。たとえば、エウクレイデスでもユークリッドでもよい。
- (5) 歴史上の書名表記 (漢字文化圏)
- (i) 旧字体は同字 (常用漢字表に並べて記載されている) の新字体で置き換える。  
たとえば、『發微算法』は『発微算法』とする。
  - (ii) 同字の新字体がなく、印字可能な場合はそのまま用いる。  
たとえば、関孝和の『開方翻變之法』は『開方翻变之法』とする。理由は、翻は翻の異体字、變の新字体は変である。
- (6) 数字の表記法  
数字は算用数字を用いるのが原則であるが、慣用句、成句、熟語に含まれる数字 (一を聞いて十を知る)、名詞 (七曜歴、十干十二支)、固有名詞に含まれる数字は漢数字を用いる。
- (7) 元号の表記法  
元号の年数は算用数字または漢数字で表し、西暦の年を ( ) で囲み年の前におく。たとえば、天和 3(1683) 年あるいは天和三 (1683) 年とする。
- (8) 生没年の表記法  
生没年は必ずしも必要ではないが、必要なときは吉田光由 (1598–1672) のように、生年と没年を二分ダーク (二分ダッシュ) で挟む。暦は慣例に従う。
- (9) 引用文の表記
- (i) 本文中の引用文は「」で括るか、本文より 2 字下げて記入する。
  - (ii) 引用文は原則として元の文の通りに表示する。
  - (iii) 引用文に補うときは [ ] あるいは ( ) の中に書く。
- (10) 書籍、論文、写本の表示
- (i) 本文中の書籍および雑誌は『』で括る。
  - (ii) 本文中の論文は「」で括る。

(iii) 本文中の写本は「」または『』で括る。

(11) 参考文献の表記

- (i) 姓の 50 音順あるいはアルファベット順に並べ、通し番号 [1][2],..., をつける。論文、書籍、オンライン資料を分ける必要はない。日本語の文献と欧文の文献がそれぞれ複数あるときは、分けて記載してもよい。
- (ii) 本文で引用するときは [1] あるいは著者名 [1] のようにする。
- (iii) 文献目録に記載する文献は、本文あるいは脚注などで引用したもののみとする。
- (iv) 書籍からの引用は該当ページを [1, p.8] あるいは [1, pp.8-9] のように示す。
- (v) 出典を確認できるように記載する。書き方は下記に準じる。
- (vi) 日本語や中国語の書籍は『』で括る。欧文の書籍はイタリック体で表す。

論文

- [1] 藤原松三郎、和算史ノ研究、東北数学雑誌、第一輯、第四十六卷 (1940)、123-134.
- [2] 三上義夫、關孝和の業績と京坂の算家並に支那の算法との關係及び比較 (一)、東洋學報、第二十卷 (1932)、217-249. [『三上義夫著作集』、第 2 卷、日本評論社、2017、所収]  
東洋文庫 ERNEST <https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>
- [3] D.T. Whiteside, Patterns of Mathematical Thought in the Later Seventeenth Century, *Archive for History of Exact Sciences*, Vol.1, No.3 (1961), 179-378.

書籍

- [4] 日本学士院 (藤原松三郎)、『明治前日本数学史』第二卷、岩波書店、2008.
- [5] 原亨吉、『近世の数学』、筑摩書房、ちくま学芸文庫、2013. [初出は、『数学史』、筑摩書房、1975]

オンライン資料

- [6] 関孝和、角法并演段圖、東北大学デジタルコレクション、平山文庫、MA/387
- [7] 建部賢弘、發微算法演段診解、京都大学数学教室貴重書ライブラリ  
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000167> (2021 年 8 月 29 日閲覧)

15. 本投稿規定は、2022 年度以降に発行される『数学史研究』に掲載されるすべての原稿に適用される。

## 別表

文書レイアウト	A4 縦、40 字 ×32 行、上余白 35mm、下余白 30mm、左余白 20mm、右余白 20mm
投稿区分	明朝体ボールド 11.5pt、左寄せ、枠で囲む
題目	明朝体ボールド 16.5pt、(半角の場合) 明朝体ボールド 17pt、センタリング
著者名	明朝体ボールド 14pt、(半角の場合) 明朝体ボールド 14.5pt、センタリング
節、小節番号	半角明朝体ボールドまたは Times New Roman ボールド 12pt、センタリング
節、小節見出し	明朝体ボールド 11.5pt、センタリング
本文	明朝体 11.5pt、(半角の場合) 明朝体または Times New Roman 12pt、左寄せ
図、表番号	半角明朝体ボールドまたは Times New Roman ボールド 11pt、センタリング
図、表キャプション	明朝体ボールド 10.5pt、(半角の場合) 明朝体ボールド 11pt、センタリング
脚注番号	明朝体 7pt
脚注	明朝体 9pt、(半角の場合) 明朝体または Times New Roman 9.5p
ヘッダ	明朝体 11.5pt、(半角の場合) 明朝体 12pt、偶数ページに著者名、奇数ページに題目、センタリング
ページ番号	明朝体 12pt、偶数ページ(左寄せ)、奇数ページ(右寄せ)
参考文献見出し	明朝体ボールド 11.5pt、センタリング
参考文献	明朝体 11.5pt、(半角の場合) 明朝体または Times New Roman 12pt
英文雑誌名	明朝体イタリックまたは Times New Roman イタリック 12pt、左寄せ
英文巻号ページ	明朝体または Times New Roman 12pt、左寄せ
英文タイトル	明朝体ボールドまたは Times New Roman ボールド 17pt、センタリング
ローマ字著者名	明朝体ボールドまたは Times New Roman ボールド 14.5pt、センタリング
アブストラクト見出し	明朝体ボールドまたは Times New Roman ボールド 11pt、センタリング
アブストラクト	明朝体または Times New Roman 11pt、左寄せ
キーワード見出し	明朝体ボールドまたは Times New Roman ボールド 11pt、左寄せ
キーワード	明朝体または Times New Roman 11pt、左寄せ